

# 鍛冶師の騎士

オメガ11( 0w0)ノイズエーケ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

驕心の抛り所、  
それを護る為には例え相手が何であれ、  
剣を向けるだろう。

※騙して悪いがヴェルフにはロリコンになってもらう（予定）  
主はヘファイストスが好きなので、自キャラとくつつけたかっただけ（； ㇏、）

希望があれば続きを頑張って書こうかな（； ㇏、）？

取り敢えず原作との変更点は隻眼の黒龍を単眼の黒龍に変更。  
くらい（ゝ・ω・ゝ）

尚自キャラは月光マンです（ゝ・ω・ゝ）

目次

鍛冶師の騎士	1
主人公設定	4
物語1 序章	6

## 鍛冶師の騎士

神々が住まう大都市オラリオ。

その中央に聳え立つバベルの塔、その一角にあるフルプレートトの騎士が佇んでいた。くすんだ銀の鎧：ボロボロになり、嘗ては威厳のあったであろう青く銀の刺繍が施された外装。

その背には月を思わせる大剣を背負い、腰には無骨な直剣。左手には龍を思わせる紋様のあるカイトシールド。

このオラリオでは武器を持つのは、基本的に冒険者と呼ばれる職業の者達のみ、しかしこの者は冒険者ではない。

この者は昔とある国に仕えていたが、単眼の黒龍にその仕えるべき国を滅ぼされ、全てを失いつつも黒龍に単騎で挑み、その片腕を奪ったが敗れてしまった：

その後気が付き、亡者のように意味も無くただ放浪していた頃、とある場所、とある神に出会った。

その神はその騎士に『行く当てが無いなら私の所に来ない？ 貴方の今の雰囲気：何かほっとけないのよ、迷惑じゃないのかって？ 大丈夫よ。空き部屋ならついこの前まで神友が使ってた部屋があるから：』

騎士は当然断った、この身は既に心折れ：生きる意味などない、全てを失った私が貴公のなんの役に立つのかと：

『生きる意味が無いなら、私が作ってあげる：使えるべき国がないなら私に仕えればいいじゃない：たとえその忠信が仮初めのものだとしても、意味なく生きるよりはマシでしょ？ それと：貴方の背負ってる大剣：』

気付けば話し込んでいた、仕えていた国の話、自身の友や家族の事、そして黒龍の事。それを神は全て受け止めた、騎士自身の腑甲斐無さや無力さを：だが騎士自身も賞賛されるべきところもある。

単眼の黒龍に単騎で挑み傷を負わせたこと、確かに国は守れなかったが、騎士の：彼の力は本物だった。

それから少しして騎士は神と共にオラリオに来た。神はオラリオでは有名なようで、隣を歩く騎士は誰だ：と口々に聞こえる。

それからまた少し立った頃、神と共に歩く騎士の前から1人の女性が歩いてきた。

神に聞けばあれは女神だという、美の女神というらしい。

見れば全てを魅了する存在、だというのに騎士は全くその女神に惹かれなかった。

『あら、私の魅了が効かないなんて…珍しいこともあるのね。』

魅了されていないのは美の女神を自身が無自覚に認識していないか何かなのだろうか、自身の思考は既に隣を歩く神に奪われている。

何故…こうまでして彼女は自身に手を差し伸べてくれるのか…

気付けば美の女神と彼女の会話は終わったらしい。帰り際にまた会いましょうと言われたが、何故だろうか…

『さ、暗くなってきたし急いで行きましょう』そう言い黒革で巻かれた手甲を手に取り中央に聳え立つバベルへと引つ張って行かれた…

手を引つ張られながら辺りを見る、人が往来する様は嘗て仕えていた国を彷彿させるが、今は彼女に仕える事と思いつ出した騎士は神である彼女に問うた。

もう1度人並みに戻れるだろうか…と

彼女は…

ふと過去を思い出していた騎士は辺りを見回した、彼女に頼まれたものがあるというのに何故ぼーっとしていたのかと考えるが、かなり時間が経っているだろう、今彼女の元に向かい謝ろう。それから要件はなにか聞こう。そう思い金属が擦れ甲高く少し重そうな音を鳴らしながら歩き始めた。

『レイヴン…だ・い・ぶ遅かったじゃない。どこで何をしていたの？私のお話をまた聞いてなかったとかそう言うの？』

『すまなかった…少し、貴公との出会いを思い出していた。』

『そう…あれから随分経ったわね……どう？生きる意味は見つけられ

たのかしら?』

『とうに見つかっているさ…そのために自分はここに残っているのだ…』

『そう…でも遅れたことは事実よね?』

『ああ…分かってた、分かっていたが!貴公は少し落ち着け!その金槌を下ろすのだ…』

『大丈夫よ、単眼の黒龍を倒した貴方なら何があっても平気よ。良かったわね、ゼウスがここにいたら悪ノリしてもっと酷くなってるわよ?』

『そうだが!貴公は毎回加減というもn!』

これが私が見出した日常というものなのだろう…彼女が害とみなしたものは排除する…彼女の日常を守り、彼女の平穏を掴むためにも。

## 主人公設定

・レイヴン（騎士）

年齢32

身長220cm

装備 アルバの兜

狼騎士の鎧

不死隊の手甲

外征騎士の足甲

武器右手 月光の大剣

左手 竜紋章の盾

左腰 ロスリック騎士剣

右腰 ヨルシカの聖鈴

スキル 《鍛冶と月光》 関係を違えぬ限りその身は不老不死となる

今は滅びし国に仕えていた王国騎士長。

普通の家庭に生まれ、国を護る騎士に憧れを持ち始める。

彼が生まれる前から黒龍との戦いはあつたが、撃退するに留まっていた。

いつしか彼は少年から青年となり、騎士になった。

それから数年数々の武功を挙げ王国騎士となるが、王命によりぐさま騎士長の座を得た。

その後黒龍に国を滅ぼされ、宛もなく放浪している頃にヘファイストスに出会い彼女に仕えることとなった。

単眼の黒龍との再戦はゼウス ヘラ ファミアリアと合同で挑むも両ファミリアの大半が壊滅。深傷を負った黒龍と一体一となるが満身創痍になりつつも、騎士の持つ月の大剣でその黒龍の首を両断し撃破した。

アイズの両親とは知り合いであり彼等の最後にアイズを任され父のように接している。一応ヘファイストスが義母になっている。

ヘファイストスとは切っても切れない関係であり、騎士がその関係を断つことはないだろう。

実はヘファイストスと交わった影響か、騎士に若干の神性とステイタスの無い騎士に異例のスキルが生まれる。

又、とある誓約によりヘファイストスの許しが無ければ、月の力は解放されない。

今作はダークソウル時空とは無関係であり、また龍なども似て非なるものである。主人公は呪われた不死ではなく、祝福された不死である事。装備や龍、国の名前などは名前のみ登場。

また既に滅んだ王国は月を信仰していた：

・既に滅んだ王国

レイヴンの仕えていた王国。

古代と呼ばれる時代から存在し、黒龍と戦闘し続けている国。嘗ては巨人の国と協力関係にあったが黒龍との戦いにより巨人の国は壊滅し、本格的に黒龍に襲われるようになる。

王と王妃の中はあまり良くなかったそうだが、それでも仲睦まじいものだったという。かつてこの国は《ドラングレイグ》とも呼ばれ滅んだ巨人の国のある物を使い栄えた国でもある。



## 物語Ⅰ 序章

ダンジョン下層にて、人を嘲笑うかのような道化師のエンブレムを掲げ戦う冒険者たちが居た。彼等はロキファミア：このオラリオの上位に入る程の規模を持つ集団である。その中に一際小さく、だが何処か強者の雰囲気を漂わせる『小人族』の戦士が戦場に指示を飛ばしていた。

「盾構ええッーッーッー!!」

モンスターと冒険者達の構えた盾が衝突し、鈍い音を上げこのダンジョンに響き渡る。

「前衛・密集陣形を崩すな!後衛組はそのまま攻撃を続行!」

凶悪な怪物

モンスターを迎え撃つは複数の種族か

らなる『ヒューマン』と『亜人』の1団だった。

二枚の大盾を腰を入れ構える筋骨隆々な『ドワーフ』、矢と魔法を駆使し間断なく打ち込む『エルフ』と『獣人』。褐色の肌のアマゾネスの姉妹は戦場を駆け巡り、味方の射撃を掻い潜りながらモンスターへと斬り掛かる。

草木すら無い荒れ果てた大地、赤茶色に染まる天井そして遙か上方にまで届くであろう壁。度重なる層で作られるダンジョン、彼等冒険者達は其処で戦っている。

「ティオナー・ティオネー!左翼の支援に急いでくれッ!」

彼の的確な指示により傾向き続ける前線は幾度と無く立て直る。

「あくんっ…もう体がいくつあつても足りなくいつ!」

「ごちやぶごちや言っでないでさっさと行くわよ!」

命を受けた姉妹はさっそうと駆け出し敵を一瞬で切り伏せ、また次の部隊の支援へと向かう。

何処からともなく現れ続け、屠れど屠れど耐えることの無いモンスターの物量によって冒険者達を呑み込もうとする…まさに悪夢とも言える光景であった。

巨躯なモンスターは骨にも似た棍棒型の鈍器を振り回し、最前線で縦を構え続ける者達へと襲いかかる。密集し盾を張っていた防衛線

はモンスターの物量によって後退していき、その規模を小さくしていく。亜人達は押されつつある。

「リヴェリアア〜ツ！まだなのおー!？」

防衛線を築き、縦を構え続ける彼らの後ろ。魔法と矢を絶え間無く撃ち続ける一団の中から高貴さを感じさせる声で魔法は紡がれる。

「☒——間も無く、焰は放たれる☒」

翡翠の髪、白を基調とした装束。浅く水平に構えられる白銀に輝く杖。細く尖った耳を生やした、神にも劣らぬ美貌を持つエルフが呪文を紡いでいく。

「☒忍び寄る戦火、免れ得ぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む☒」力強く、流麗な旋律を持つ『詠唱』。

足元に広がる魔法円は翡翠に輝き、無数の光粒を巻き上げる。その柳眉を逆立たせ、彼女は呪文を紡ぎながら前方の一点を見据える。

「☒至れ、紅蓮の炎、無慈悲の猛火☒」

彼女の前で戦い続ける前衛組は歯を食いしばる。まだかまだかと待ちわびるように。

「オオオオオオオオオオオオウツツ!!」

モンスター達の最奥では『フォモール』が吠える。

その巨体で仲間さえも蹴散らしながら驀進し、己が持つ得物を振り上げる。

盾を構えていた一団は目を見開く。その瞬間、フォモールの得物は振り下ろされ前線の一角は吹き飛ばされた。

「ベート、穴を埋めろ！」

「ちツ！前線は何やってやがる！」

穴の開いた防衛戦に『狼人』が向かうが間に合わない。その隙にモンスターは進撃を開始する。そうして数匹のモンスターの侵入を許してしまい、前衛に守られていた魔術師やエルフが青ざめる。そしてフォモールの二撃目が来るのは同時だった。

「レフィーヤ!？」

一人のエルフが中を舞い、地面へと叩きつけられる。

「——あ」

「フウーツ……！」

倒れる少女へとフォモールが近付いていく、醜悪な獣面のフォモール。仲間を紙同然に吹き飛ばした敵。彼女の瞳には振り下ろされた鈍器が映った…直後。

金属音が鳴った…

「えっ?」

直後彼女の視界は翡翠色に染まった。気付けばフォモールの首は地に落ち、その巨体が倒れ大きな地響きを起こす。

「貴公…無事か…」

呆然とする少女の視線の先。鈍い銀に輝くフルプレート、青く銀の刺繍の施された外装そして竜紋章の盾、無骨な直剣。

「鍛冶師の…騎士…」

騎士は無言で彼女の身体を横抱きに持ちあげ、後衛まで退避する。

「☒汝は業火の化身なり☒」

「『尽くを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを』」

紡がれる詠唱は完成へと至る。

「レイヴン…下がって!」

少女を横抱きにし後退する騎士を横目に翡翠の彼女は最後の詠唱へと入る。

「☒焼き尽くせ、スルトの剣——我が名はアルヴ☒!」

白銀に輝く杖を振り上げ、リヴェリアは己が魔法を発動させる。

「☒レアラーヴァティン☒!!」

大炎。

地上から吹き出す無数の円柱。

耳に弄するほどの轟音と共に、炎の射出がロキファミアを避け放射状に続いていく。天井にまで届く炎の極柱、フォモールを丸呑みし、その業火によりモンスターが次々と消えていく。広範囲殲滅魔法、モンスターの大群を僅かなうちに消し去った。世界は炎に包まれ、皆が武器を下ろす。彼等の顔は太陽の如く染められていた。

騒がしき醸し出される。

金属鎧が擦れ行き交う人により騒がしきはより一層引きだたされ、その中で彼等冒険者達は野営地の準備を進めていた。資材を運ぶ者、テントを建てる者、走って言伝を伝える者など様々だ。

その中に騎士はいた。その隣を歩く金の髪をなびかせる少女、アイズヴァレンシユタインその人だ。

「どうしてお義父さんがここにいるの…?」

テクテクとその華奢な身体を歩かせながら隣を歩く騎士に聞いた。いつもはヘファイストスから離れない彼がどうしても、こんな深層まで来ているのか疑問だったからだ。

「そうだな…貴公が遠征に行くと聞き心配で来た、と言うのはダメだろうか…」

「別に…：…ねえ、私は強くなった?」

騎士は強い、恩恵を得ずともあらゆるモンスターを屠り、英雄詩の怪物を倒すほどまでに。アイズは騎士が自分の父親ではないことを知っている、自身の実父は既に死していることも。だからこそ強くあらねばならないと、騎士に置いていかれないようにと強さを求め続けている。

「——まだだな…だが、後少しだろう。私もそろそろ貴公等の世代へと道を明け渡せねばな…」

「黒龍を屠った英雄様が何言ってるんだい?」

そう話しながら、ロキファミリア団長フィンディムナが現れる。

「時間という概念が存在しないのに年寄りぶっちゃダメだと思うな—なんてね」

「そう思うのであれば貴公はあのアマゾネスの求愛を受けるべきではないのか?」

「求…：愛?」

「アイズ…：貴公はまだ知るべきでは無い事だ、気にするな。」

この騎士…：見た目の割に親バカ成分が多い。アイズに近づこうものなら問答無用で斬り伏せる勢いを見せるもアイズ本人に『風』で気絶させられ、ヘファイストスの元へと送還されるほどである。

気が付けばフィンはアマゾネスに追い掛け回されていた。

「さて…用事も済んだ、私は地上へと戻ろう。」

騎士はゆつくりと上の階層へと続く階段に向かい始める。無事に帰ってこい、アイズにはそう聞こえた。

「うん…」

騎士は声を上げ笑う。相変わらず無口で感情を出さないな…と。

「ではな」

背を向け騎士は歩いて行った。この後五十階層近くで異変が起きた事を知り、地上に帰ってきたアイズを急いでミアハの元に連れていったのは余談である。